インフラマネジメント研究部会

私たちが考えたSDGsとは?
PART II

部会長 **中川 均**
なかがわ ひとし
一般社団法人日本観光自動車道協会
代表理事
株式会社 白糸ハイランドウェイ 顧問

私たちの部会ではタスクフォース活動の一環として、SDGs に取り組み、住み続けられる街づくりとグリーンインフラをテーマに活動した。

その一部はすでに秋の夜学校で一部報告したが、本稿ではその後の活動として長岡工業高等専門学校の学生チーム「Be-Mice」とのセッションを実施した内容を中心に報告する。

まず進め方は、あまたある SDGs 本のコピペにはしないで各自の地頭で考えた思いを発表し、ワークショップ形式で意見の集約を行い、実際の街歩きにより都市におけるグリーンインフラの現状の課題を探った。

その後、行政のインタビューを経て市民目線での意見も取り込むこととした。行政インタビューは横浜市にて実施し、その模様は今春発刊予定の JFMA ジャーナル別冊 調査研究部会特集号『ESG/SDGs とファシリティマネジメント』に記載されている。

また市民目線での意見聴取は Be-Mice にお願いした。その結果を発表することが今回の中心テーマとなる。

部会メンバーのグリーンインフラの定義は国交省の定義にならって、「地域課題を解決するために配置された自然を利した施設の総称」とした。

その定義にもとづく部会内のワークショップ結果を Be-Mice のメンバーと共有し、さらにディスカッションしたところ、さまざまな相違点が出てきた。

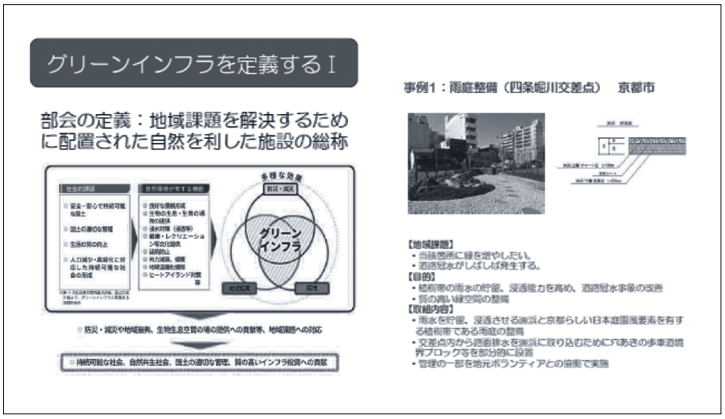
相違点は、部会メンバーからの意見が多く寄せられた点は、良好な自然環境を守る、インフラメンテナンスを持続可能にする等の供給サイドからの課題提起が主体であったが、学生からは、公共サービスを充実する、生活のしやすさ、地域社会との強いつながりという利用者目線あるいは住民目線からの課題・意見が主体であったということだ。ある意味でこれは当然の帰結であったかもしれないが、あらためて市民が重視する視点と関連実務者（当部会メンバー）との違いを痛感した。

そこで Be-Mice のチームに彼らの定義をお願いしたところ「今ある資源を大切に循環型の資源再利用を図る施設」というわれわれとは違った定義がなされた。

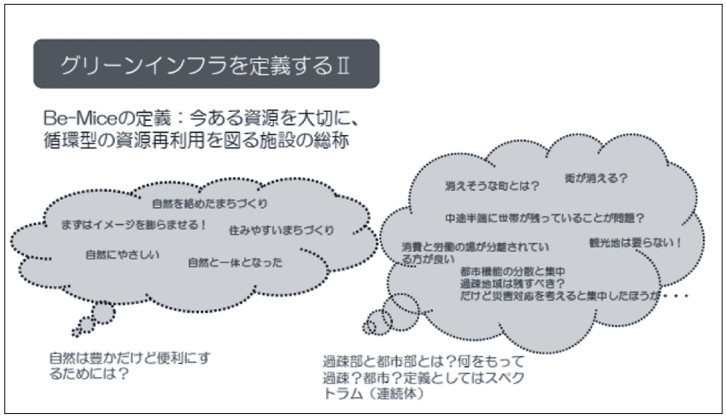
例えば、過疎と都市の定義は?過疎はなくすべきか、計画的に残すべきか?などの議論がなされ、今後の活動の参考となる意見が寄せられた。

彼らの定義の事例としては雪国、長岡の風物詩でもある「消雪装置」を、ただ雪を溶かすだけではなく循環型にできないか?雪は何かに使えないか?など、考えもしなかった意見も飛び出し、楽しいワークショップを開催することができた。

今後は彼らとのセッションによって得られた、いくつかの素朴な疑問や問題提起を受けて来年度につながる活動としていきたい。◀



図表1　部会で定義したグリーンインフラ



図表2　Be-Miceのチームによるグリーンインフラの定義